

令和の首里城復興 Zoom 座談会
第3回「首里城復興基本計画について」 実施概要

【日時】2021年2月22日(月)14:00~15:30

【登壇者】(☆…進行・ファシリテーター)

- ・下地芳郎(OCVB会長、有識者懇談会会長)
- ・池田孝之(琉球大学名誉教授、新・首里杜構想検討部会長)
- ・波照間永吉(名桜大学教授、琉球文化継承・振興検討部会長)
- ・島袋芳敬(沖縄県政策調整監)
- ☆屋比久義(沖縄県知事公室特命推進課課長)

【座談会概要】

1. 令和の首里城復興座談会(今回のテーマ)とは?

- 視聴者の皆さんは、「令和の首里城復興」という番組のタイトルを、どう感じているだろうか。「平成の復元」とは異なり、あえて「復興」という用語を用いている。首里城正殿を建てることは同じだが、その背景となる県民の思い・気持ちは同じではないかもしれない、今回の首里城の復元を超える部分の意味を、一人ひとりが考えるきっかけになればよいとの願いも込め、「令和の首里城復興」とネーミングした。(屋比久)

2. 首里城復興基本計画の内容は?

- 省略

3. 有識者懇談会座長、部会長がどう考えて、議論してきたか

《下地さんは、懇談会の議論にあたって、座長として、この「令和の首里城復興」をどのように捉えていたのか、また、議論の方向性として注意していたこと、心がけていたことは?》

- 首里城火災から1年4ヶ月近く経った。今回の首里城復興基本計画は昨年3月にまとめられた基本方針を踏まえて策定されたもので、2つの部会で議論したほか、様々なシンポジウムなど民間サイドの動きなども集約したものになっている。大きく3つの視点があったと思う。1つは首里城の復元をどう成し遂げるか。県民だけでなく国内・海外からもお見舞いや寄附をいただいております、この期待にどう答えていくか。2つ目は首里城だけでなく、その周辺の首里地域も含めて幅広く捉えること。3つ目は、改めて琉球文化の在り方も考えていくという、3つの視点である。また、その基本は、委員だけではなく県民参加型というところが大きな方針だった。(下地)

《「見せる復興」に対する期待、「見せる復興」により観光客だけでなく県民の皆さんに感じてほしいことは?》

- 首里城の火災前の状況を考えると、県民にとっても観光客にとっても、首里城は当たり前そこに存在だった。それが一瞬にして失われた。今回の首里城復興は、失われた首里城を復興させるとともに、さらには地域全体、文化全体という大きな方向性がある。「見せる復興」とは参加するという意味でもあると思うが、すでに県民参加型の取組が行われているし、OCVBでも、ツーリズム EXPO など取り組んでいる。参加するという意識をどれだけ継続できるかがポイントだと考えている。(下地)

《建物を復元するだけではない「プラスα」の部分が、琉球文化継承・振興部会での議論の中心だったと思うが、部会長の波照間さんご自身はどうお考えか?》

- 単なる建物の再建に終わってはいけないということは私もまったく同感である。首里城に象徴される、祖先が築き上げた琉球・沖縄文化の精神がそこに込められなければ意味がない。様々な文化、例えば伝統工芸、美術、芸能、建築、陶芸、染織などあらゆる沖縄の文化の継承と発展につながっていかなくてはならないと思う。部会では、伝統工芸などは産業としてなされてきているが、全体としてはかなり厳しい状況にあるという意見があった。これを未来にわたって発展させなくてはならない。抽象的な話で恐縮だが、そのような精神が未来に向かって拓かれていく、そういう事業にならなくてはならないと思う。(波照間)

《精神を込める話は、復興基本計画にはどう反映されている？》

- 部会では方針4、5、7、8を中心に議論したが、方針8「琉球文化のルネサンス」が非常に重要に思える。100年先、200年先の未来にあって、我々の琉球文化・沖縄文化がどのように花開いていくのか。花開かせなくては、琉球文化のルネサンスは果たされない。そのためには、県民一人ひとりの心の中に琉球・沖縄文化を追求していくことが大切だと思う。(波照間)

《県に期待する役割は？ また関係するステークホルダーと期待するものは？》

- 文化とは漠然としている。空気のようなものだ。意識して考えなくても暮らしているが、しかし気づくとそのものの価値がいたく感じられる、それが文化である。その典型的な例が「しまくとぅば」だと思う。しまくとぅばによって沖縄の文化が形作られているが、いまは消滅の危機にひんしている。継承に向けた取り組みは進められているが、しまくとぅばを継承していくためには高い壁があり、県も取り組む必要があるし、地域も取り組んでいく必要がある。それぞれがそれぞれの立場で取り組むことで琉球文化のルネサンスが成り立つ。県の方々、委員会に参加している我々、そして県民が一緒になって、実際の力をこめる作業を積極的に展開する必要がある。(波照間)

《「新・首里杜構想」について、旧構想との違いや、新構想に期待することはなにか》

- 私は首里地域の三重構造と言っているが、旧構想では、首里地域全体の風土を基盤として、それに成り立つものの象徴として首里城が復元された。その思想は素晴らしいもので現在も継承されているが、旧構想ではできたこととできなかったことがある。つまり首里城そのものの復元はできたが、その周辺の文化財で手付かずのものがある。また、さらにその周辺にある首里地域全体のまちづくりはほぼ手付かずである。新構想の方では、全体のまちづくりまで広げていくにはどうしたらよいかということがいちばん重要なことだと思う。(池田)

《「新・首里杜構想」を着実に実現していくために、この10年で優先して取り組むべきことは？》

- まちづくりは、都市計画では10年～20年の計画で実施する。風土や風景は100年、1000年かかるといわれる。そのため、効果的に取り組みを進めていく必要がある。そのためには「点・線・面」といわれるが、拠点となる点をしっかりと整備していくことが重要だ。首里城は当たり前だが、円覚寺、中城御殿など手付かずの周辺資源を拠点として整備していく。そして、それをまちづくりにつなげるため、道（スーヅグワー）のネットワークを整備する。さしあたってこれからの10年間はこれらの骨格をしっかりと整備していくことかなと思っている。(池田)

《令和13年度までの復興基本計画、その後の展望、その後に向けどうすべきか？》

- 復興基本計画は10年間の計画に過ぎない。地域では50年、100年という視点、それこ

そ次世代につなぐ考えであった。大切なことは、基本計画の先にある実行計画をしっかりと進めていくこと、次の沖縄振興計画にいかに関与し具現化していくかということ、財源も欠かせない。より具体的な取り組みを進めていながら、一般の県民にとってもわかるように「見える化」し、進捗管理を定期的に公開していくことが大切だ。いろんな視点からの意見を集約すべきだと思う。(下地)

《県の取組のアピール含めた評価や、次の展望は?》

- 県では、首里城復興基本方針を策定し、各種取り組みを進めている。具体的には、復興展示室を設置したり、在りし日の首里城を含めて展示したり、県民参加のもと被災した赤瓦の漆喰剥がしとそれを活用したシーサーづくり、近くの学校の花壇への活用などを行ってきた。県産材を使って復元してほしいという意見もあり、赤瓦の研究などを進めているところである。復興計画についてはまとまりつつあるが、その後の実施計画は、新しい沖縄振興計画へ反映したいと考えている。首里城については政府にもしっかり伝えて、実行できるような計画づくりを進めていく。沖縄県公式首里城復興サイトで、様々な情報を掲載している。火災から現在までの様子がわかるので、ぜひご覧頂きたい。(島袋)

《首里城に象徴される歴史・文化的価値の再発見に関して、第2回座談会で意見があったような県民の間の「温度差」についてどう考える?》

- 温度差は、琉球・沖縄の歴史文化への接触の機会に関わっていると思う。学校での教育の機会を増やしていくことで、自らの文化への理解を深めるとともに、自らが拠って立つアイデンティの問題へつなげていくことで、首里城、地域の文化、沖縄県の歴史文化に深い愛着が生まれると思う。ある先輩の話として、自分たちが中学生の頃は琉球の歴史文化について教わらなかった、大人になって自分で興味を持ち調べるようになり、そのことが自身の自信や誇りにつながっていたという。私自身、石垣島の出身で、重い税を押し付けられたなど首里城に関しては負の感情を持っていた。負であっても自分たちの歴史を考えるきっかけとなっていた。地域の歴史文化を知ることが、未来を見ることなのだと考えていただき、首里城をはじめ、自分たちの拠って立つところを考えてもらいたい。(波照間)
- 私と波照間先生はおそらく同年代かと思うが、団塊の世代は学校教育を含めて親からも琉球の歴史・文化について教えてもらう機会は少なかったと思う。また、私の世代では小学校低学年の頃に「方言札」があって、これがしまくとぅばを使うこと自体の劣等感を植え付けたのかなと感じている。また、私が沖縄市の文化課長だったときに、越来グスクの発掘があったが、グスクの石垣は戦後、軍道建設の際に破壊され、どこにいったかわからないという非常に残念な状況であった。失ったものについては、風景もそうだが、心の問題も含めてじっくり取り組んでいく必要があると感じている。(島袋)

《第2回座談会であった首里城への思いについて、首里城を中心とした場所、空間が持つ力や魅力のことを指していると思うが、これをどう活かすべきか?》

- 首里城の場所は風水思想に基づくものといわれている。かなり広い範囲に渡って2つの水系に挟まれ、高台でありながら水が湧き出る豊かな土地である。大地の持っている魅力の象徴として首里城がある。首里城を訪ればそのことがわかる。また、首里八景といわれ、首里城から見える眺望は素晴らしいものがある。まちのふもとから見上げる風景も素晴らしい。首里に行けばすぐに感じるができる。まちづくりは舞台づくり。文化が生き生きとする舞台を空間として整えることがまちづくりだと思う。(池田)

《事業者を含めた県民や多くの方と連携・協働して、相当な長期に渡って歴史まちづくりを推進していくには何が必要か?》

- 拠点整備や基盤を整備するのは行政の力が必要だが、まちづくりには住民の力が重要。か

とって、住民に任せれば進むのかといえはそうではない。国・県・那覇市・住民・NPO・観光客など、いろんな主体があり、みんなで一緒にやっていくためには連携する協議会づくりがスタートになるのでは。歴史まちづくり法の適用を受ける話もあったが、実現していない。まずは話し合うための組織づくりが重要だと思う。(池田)

- 林業組合の方々との話の中で、オキナワウラジロガシを首里城御用材として出すときには、実際の国頭サバクイで送り出したという話があった。また、首里城正殿の大龍柱は与那国島のニービヌフニ（細粒砂岩）が使われているが、今回もそうなるだろう。この大きな石材を運ぶときに木遣り唄を歌っていたという。集落が競って大きな石材を搬出していたようだ。しかし、この木遣り唄は伝承されているが、芸能そのものは長いこと行われていないという。今回の首里城復元のときには、石木遣りの芸能を復元できないかと、アプローチしているところである。このように、地域の芸能の復興と首里城の復元に関わることができれば、素晴らしいことだ。国や県がやっている事業ではなく自分たちも首里城復興にかかわるのだというムードが作り出せると思う。今回の復元ではオキナワウラジロガシは8本程度しか手に入らないということだが、100年先、200年先の改修を見据え、植林事業を起こすべきだと思う。県民の一人一本運動でもよい。そういったところから始めることが大切ではないか。(波照間)

《首里城復興への思いを多くの人々と共有し、取り組んでいくために今後必要なことは？》

- 首里城の消失をきっかけとして様々な議論が始まっているが、歴史は立場によって見方が異なるし、沖縄は有人島が47あるというが島によっても見方が異なるだろう。観光の基本資源は「自然」と「文化」で、そこで暮らしている人とどう交流が持てるかということが観光地としての評価になる。いま、改めて県民一人ひとりが、自分が生まれ育った島や生活している地域で、新しい発見をすることが必要だろう。そのなかで、首里城復興への参加意識を深めるためには、例えば協議会などが発行する首里城応援会委員証みたいな、首里城復興に関わっているというものを発行しながら、活動を県内・県外・海外へ広げていく。思いを形にすることが大切。これを機に新しい取り組みを進めることが大切だろう。ワクワク感も大切だし、戦争意識についても関心が高まった。平和についても改めて考えるなど、ひとつの見方だけでなくいろんな視点を持って考えていくことが大切。その総決算が観光地として県外・海外から評価される指標になると感じている。(下地)
- OCVBの役割としては、情報発信の強化と考えている。OCVBにも国内外から首里城を応援する声や寄付金が多く届いている。それに応えるためにも情報発信していく。首里城復興の今の姿を国内外へ広げることがOCVBの役割だと感じている。(下地)

《復興基本計画の推進体制について沖縄県のスタンス・考え方は？》

- 首里城火災の後、国内外から多くの励ましや復興に関わりたいたいとお言葉をいただいた。首里城復興基本計画をまとめる段階で、なお声が大きくなってきた。本日、あらゆる視点があるという話があったが、視点を変えることで琉球・沖縄の奥深さが浮き彫りになったと感じている。先生方のご協力を得て復興基本計画をまとめる段階であるが、これは終わりではなく始まりである。できるだけ多くの方が参加できるシステムづくりを行ってきたい。(島袋)

(視聴者からの質問・感想)

《琉球文化の継承・振興を図るとのことだが、一般の方よりも工芸や芸能などの担い手への共有・周知が必要だと思う。具体的にどのように共有・周知していくのか》

- この点については、部会でも議論があった。部会では、伝統工芸は必ずしも生活が成り立

つような産業となっていない、これを改善し新しい作品が生まれる状況にしてほしいと意見があった。そのためには、県外・海外に所在する沖縄の工芸品の名品の展覧会を行い、担い手に気づきややる気を与えるとともに、県の財産として蓄積できるようにしてほしいという意見があった。今回だからこぞできる大きな企画があるはずなので、それを沖縄の伝統工芸の未来につながるものとしてほしいという意見である。伝統芸能については、この機会に首里城復興に寄せられた思いへの感謝として、琉球芸能のいわゆる公演旅行をしてはどうかという意見があった。琉球には「踊り奉行」として冊封使を歓待する部署があったが、これの現代版として県営の舞踊団ができるのではないか。また、芸能を披露するときに本物の衣装や道具を見てもらうことも必要ではないか。それが芸能だけでなく工芸の担い手にもよい影響を及ぼすと思うという意見があった。(波照間)

《先程、下地先生から「参加する意識の継続が大事」というような発言があったと思います。が、世界のウチナーンチュや、県外の大学や地域の県人会などのネットワークを活用して、首里城復興についてアピールしていくことができたらいいなと思いました》

(本日の座談会の感想)

《観光地としてどうあるべきか?》

《視聴者からの質問：首里城復元や首里のまちづくりを進める際、コロナ後の新しい観光のあり方とどう結びついていくべきでしょうか》

- 「観光」というとレジャーの感覚が強いと思うが、本来の「国の光を観る」という意味からすれば、優れた自然や文化を見ること、優れた地域の誇りをみていくことが観光である。観光の基本は「住んでよし、訪れてよし」というが、私はこれに「受け入れてよし」が必要だと考えている。観光を受け入れることによって住民の生活が損なわれてはいけない。このバランスをしっかりと取ることがこれからの沖縄の観光であろうと感じている。

(下地)

- 交通環境をしっかりと整えることが一番の問題で、車環境だけでなく歩けるまちづくりが重要である。私は「奥行きのあるまちづくり」と言っているが、表通りだけではなく、奥行きのある首里のまちを歩いて回れる、歴史文化を体験するまちづくりができれば、住民も観光客も一緒にやっていけると思う。(池田)
- 首里城ができて、私たちの心の中が虚ろであってはいけない。私たちの心の中に、沖縄文化を担う主体という、新しい沖縄文化をつくっていくのは我々だという気持ちを持つことが大切である。沖縄学の父である伊波普猷の言葉に「汝の立つところを深く掘れ、そこに泉あり」というものがある。まさに沖縄の地に生きている私たちの故郷の歴史・文化や産業などを深く知ることが、美しい首里城を誇りに思い、自分たちの生活を未来に向かって切り拓く術だろうと思う。(波照間)

(首里城復興への取り組みの決意)

- 首里城復興基本計画は国や那覇市の協力を得てまとめたものである。県だけでは実現できるものではない。まちづくりや交通など、行政がすべての力を結集して実現していくことが試されていると感じている。次の段階では、新しい沖縄振興計画にもしっかりと反映させ、実施していきたい。長期的な大きなプロジェクトになる。今後できるであろう応援団や協議会など、市民・県民参加のもと、実現していきたい。(島袋)